



## 『世界の渡り鳥図鑑』

Unwin, M. and Tipling, D. 著  
森本 元 監訳

2021年3月  
緑書房 発行  
287頁  
定価（本体 5,800円＋税）

平識 善一朗・浅川満彦

（酪農学園大学 獣医学群 獣医学類 感染・病理学分野  
医動物学ユニット / 野生動物医学センター WAMC）

図鑑と銘打つが、採鳥の際、野外で用いて便利なアレではない。本書の形態や内容は以下ゼミ生が紹介しているように、自宅や研究室で開いて楽しむあるいは学習するタイプの書籍である。しかも、開くと約60センチの幅となり、PC作業しながらでは、正直、不便であった。しかし、このような大型の書籍が、今、この国の悲惨な出版業の状況下で刊行され、それも比較的安価で提供されていることに、私（浅川）は驚嘆しつつ畏敬の念すらおぼえる。このようなこと（決して、当たり前ではないこと）も、若い人にしっかり伝わって欲しいものだが…。

原書は米国イェール大学の出版会から2020年に刊行されたばかりで、これを（公財）山階鳥類研究所の森本研究員が監訳された。信頼のおける資料であることこの上無し。もちろん、以下で紹介されているように、様々な鳥類それら自体の生活や姿を楽しむのだが、原書の題名からすると、著者の意図は鳥類の渡り bird migration の自然誌（史） natural history である。それを判り易く illustrated にした書なので、「渡り」という行動様式を究極要因（進化と生態）から理解したい方には最適である。しかし、詳細な生理学的な機序、すなわち至近要因については皆無ではないが、まったく少ないのでその点は、期待してはいけない。

繰り返すが、全世界を版図にした鳥の渡りのダイナミズムを一瞬で把握できる仕掛けなので、「ならば、保全しないと！」という気にさせる。なお、本書には日本のことについても触れているが、最新なものは東京大学出版会から『鳥の渡り生態学』（樋口広芳 編）が刊行されたばかりなので、そちらと併せてご覧になれることを推奨する。  
(浅川 文責)

29.5センチ×14.2センチ×3.5センチの大型本となっており、オールカラーの図鑑である。本書は第1章ガンカモ類・潜水性鳥類、第2章海鳥類、第3章涉禽類、第4章鳴禽類、第5章ワ

シタカ類・フクロウ類、第6章その他の渡り鳥といった章構成で、計67種の渡り鳥を紹介している。本書冒頭でこの本の題名にもなっている渡り鳥や専門用語などについて丁寧に説明されており、私（平識）のような初学者には有益であった。本書特徴としては、図鑑らしく各種のサイズ、形態、生活様式分布と渡り経路、保全状況、生息地（繁殖・越冬地）などについて美しい写真とともに記載されていた。特に、渡り経路に関しては原書が刊行された2020年にまでに明らかになった事実も記述され、資料性も高い。

まず、第1章では日本でも観察することができるコハクチョウや特徴的な渡りを見せるインドガンは私（平識）自身とても刺激を受けた内容であった。第2章では「渡り鳥の大御所」として知られるキョクアジサシとアホウドリを知ることができ、本書カバーのニシツノメドリもこの章で確認した。この章で驚いたのは、コウテイペンギンがここで扱われていたことである。渡り鳥という視点でコウテイペンギンを取り上げることはこの本ならではの視点かと感じた。第3章ではツル類やシギ類が紹介され、とりわけ、目を見張るのはツル類の美しい写真であった。また、それに加えコオバシギの写真は必見である。第4章はツバメ類など馴染み深い種を扱っており、ツグミやムシクイのような種も含まれた。第5章の猛禽類は、本書を手にとった理由となる程、私（平識）自身一番興味をそそられた鳥類である。彼らの生態的特徴も大変興味深い上に、写真はとても力強さに溢れ、猛禽類好きの読者には最高の章であろう。第6章では日本に飛来するカッコウ類や愛玩鳥類としても知られるセキセイインコなどが扱われていた。

（平識 文責）